しまむにの歩み

しまむにぬ ちゅまた

1950～1960年代　【衰退の危機】しまむに禁止と若者の島外流出


小学校での授業風景（1960年代）

方言札（方言の使用禁止）：本土での生活に順応するため、学校でしまむにの使用が制限。
使った生徒は罰として「方言札」を首から下げさせられた。

集団就職：中学校・高校を卒業後、多くの若者が都市部で就職。島を離れる動きが加速。家庭での継承が困難に。


集団就職のため、はしけに乗って本船に向かう若者たち

1990～2000年代　【再評価】失われゆく言葉への気づき

1994年・1996年　和泊町・知名町で相次ぎ、しまむにをテーマとした大会が始まる。「禁止」から「文化」への意識変化。

2009年　ユネスコが、しまむにを与論・沖縄北部とともに「国頭語」として、「消滅の危機にある言語」と発表。継承・保全の見直しが始まる。

2010～2024年　【協働】島民と研究者のタッグ



島民と国立国語研究所との交流（2017年）

2010年　のちに国立国語研究所所属となる横山晶子さんが、しまむにに関する研究（フィールドワーク）を開始。

2015年　のちに国立国語研究所所属となる山田真寛さんが加わり、言語復興に向けた草の根活動を開始。

2016年　松村雪枝さん（島民）・山田さん・横山さんが、知名町上平川の方言絵本『みちゃぬ ふい（土の声）』を制作。その後も、2019年に『シマノトペ』、2022年に『ましゅ いっしゅーぬ くれー』と、しまむにを題材とした絵本を刊行。

［**2017年～2020年**］沖永良部島の島民による、国立国語研究所への訪問と取り組み発表が続く。

2019年　和泊町・知名町それぞれが、国立国語研究所と、調査・研究・継承活動に向けた連携協力を締結。

知名町公民館講座としてしまむに継承の拠点「しまむにサロン」開講。辞書作りの中心メンバーたちが出会う。


「しまむにサロン」（2019年）

「和泊町島ムニ継承推進協議会」発足　**2020年**

しまむにを体系的に学べる読本『0から学べる島むに読本』（横山晶子・著）刊行　**2022年**

「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・沖永良部」開催　**2023年**

「知名町島ムニ継承推進協議会」発足　**2024年**

玉城字で住民主体の辞書を作る「玉城字語辞典編さん委員会」立ち上げ。編さん過程で集めた単語をまとめた「玉城方言語彙集」を字全戸に配布。



『0から学べる島むに読本』（2022年）

【結実】未来への大きな一歩　2025年

6月：国立国語研究所・和泊町・知名町による「3者連携協力協定」を締結。また、知名町立下平川小学校でも協定締結。
島民・行政・学校・研究機関が一体となって継承に取り組む体制が確立。


「3者連携協力協定」締結（2025年）

8月：田皆字で住民主体の辞書「たんにゃむに辞書」初版刊行。国立国語研究所との協働で、高齢者への聞き取りから構築したデータベースを活用し、対話チャット型AI「AIたんにゃん」開発。

下平川小学校と国立国語研究所の共催で「第1回島ムニ祭り」開催。しまむにを通した手遊びやシマ唄で、老若男女がしまむにに親しむ。

※見出しのしまむには、屋者字の児玉富恵さんに教えてもらいました。

目　次

しまむにって何？……2
しまむにの歩み……3
どうなる？どうする？みんなのしまむに……4
しまむにをつなぐ仲間たち……6
えらぶでしまむにみ～つけた……10
国立国語研究所と島民の取り組み……12
みんなで話そう！しまむにの未来……14

この本に登場するなかまたち
うぬ ほんに いじていちゅーぬ あぐんちゃ


沖良子さん
下平川字（ゆしきゃ）
p.9 / 14 / 15


田中美保子さん
国頭字（くんじゃい）（島ムニむんちゃの島ムニ保存会）
p.7 / 13 / 14 / 15


田邊ツル子さん
田皆字（たんにゃ）（たんにゃむに辞書編集委員会）
p.3 / 6 / 12 / 14 / 15


玉城字語辞典編さん委員会
玉城字（にゃーとぅ）
p.3 / 8 /14 / 15


山田真寛さん
（国立国語研究所 准教授）
p.3 / 12 / 13 / 14 / 15


横山晶子さん
（国立国語研究所 テニュアトラック助教）
p.3 / 12 / 13

※表題のしまむには、国頭字の林シズエさんに教えてもらいました。

※見出しのしまむには、国頭字の田中美保子さんに教えてもらいました。

しまむにって
しまむにちぬーよ？
何？

これは、「しまむに（沖永良部語）」で書かれた、沖永良部島の紹介文です。このしまむにが理解できるでしょうか？言葉を今、どれくらいの人50年前の島の人なら、ほとんどの方が理解できていたのかもしれません。

しまむには、私たちの島・沖永良部島で脈々とつむがれてきた言葉です。このしまむには、2009年にユネスコが発表した「世界の消滅危機言語地図（Atlas of the World's Languages in Danger）」において、与論・沖縄北部とともに「国頭語（くにがみ）」として、消滅の危機にあると発表されました。

「なんだか寂しい話だな…」と思ったあなた、待ってください！実はこの、たった今、沖永良部島では、しまむにを巡り「復興のムーブメント」が巻き起こっているのです。

「しまむに」のすごさはその多様性にあります。沖永良部島に42ある字（集落のこと）が違えば、発音や単語はもちろん、文法も違います。また、ある人は、「しまむにには先祖の暮らしを描写する力がある」と、その記録性についてもふれました。

これまでも、方言辞典の発行や方言劇、方言かるたの作成など、しまむにを残す取り組みが行われてきましたが、近年、その輪が更なる広がりを見せています。そんなしまむに継承の最前線を伝えるために本誌は作られました。高齢者から聞き取り集めたデータを利用して辞典やAIを作り上げた事例や、学校や島ぐるみの取り組みなど盛りだくさんです。

そして、活動に共通するものは、未来への不安を抱えて眉間にシワを寄せながら行う「お勉強」ではなく、一貫して「笑い合いながら共創を楽しむ」という、明るいしまむに継承です。

研究では、沖永良部島に、今流暢に話せなくても「聞いて理解できる」という潜在的な話者（パッシブ・バイリンガル）が、子育て世代にもたくさんいると言われています。つまり、きっかけさえあれば、しまむにはいつでも復活できる可能性を秘めています。だから、あなたに今、「復興のムーブメント」を伝えたいのです。

「しまむに」は、この今も進化しています。意思疎通のためだけの言葉から、世代をつなぎ、地域を連携させ、未来に向かって私たちの背中を押してくれるツールへと。

その先には、懐かしくて新しい、島の宝物がきっとあなたを待っています。

をぅがみやぶら。
えらぶぬ しまわ ふぁなとぅ
さんごぬなーふぁぬ
しまでいろ。
じゃがいもとぅゆりぬ
まんでいできてい
かごしまとぅまじりたぬ
むんぐとぅまにほんにてぃむ みじらしゃぬ
しまでいろどー。

※見出しのしまむには、手々知名字の大脇克子さんに教えてもらいました。
※冒頭の沖永良部島の紹介文のしまむには、国頭字の先田光演さんに教えてもらいました。
※本誌では、しま（集落）で使われる言葉という意味も込めて、おもに「しまむに」とひらがなで表記しています。